

# 筆者の

# ものの見方と

# 向き合う

三年二期の説明文「作られた『物語』を超えて」  
具体的な事例によって、  
筆者の主張が展開される論説の文章です。

今号では、この教材に焦点を当て、  
筆者へのインタビュー、  
二つの教材分析・実践を通して、  
筆者のものの見方・考え方を受け止めて  
自分の考えをもつ授業について考えます。

## 筆者・山極寿一に聞く

——作られた「物語」を超えて

「作られた『物語』を超えて」の筆者・山極寿一さんに、  
この文章に込めた思い、これからの教育に願うことなどについて、  
お話をうかがいました。

文章・濱野ちひろ 撮影・伊東俊介

## 正当化の手段 としての「物語」

——「作られた『物語』を超えて」では、  
人間が身勝手な解釈をもとに「物語」を作  
り出すことについて、ゴリラを例に述べら  
れています。

霊長類学者として三十年以上前からゴリ  
ラの研究に携わってきました。私が研究を  
始めた頃はゴリラについては知られていな  
いことがまだまだ多く、暴力的で恐ろしい  
動物、というイメージがもたれていました。  
しかし、それは事実とは異なります。長年  
のフィールドワークを通して、私は自分の  
目でゴリラの社会を知ることができました。  
私の目に映るゴリラは、穏やかで遊び好き  
で子育て上手、群れの仲間のみならず周り  
の存在とも共存する平和な動物です。

——「物語」という表現には、どんな意味  
が込められているのでしょうか。

執筆するにあたって念頭に置いたのは、  
芥川龍之介の短編「桃太郎」です。有名な  
昔話を鬼の立場から描いたものです。「鬼  
が島」で安穩に暮らしていた鬼たちのもと  
に、桃太郎が突如として現れる。逃げ惑う  
鬼たちを追い立てる桃太郎に、鬼は恐る恐  
る、自分たちは何か無礼でもしてしまった





## 「物語」の裏側には、必ず作った側の意図がある。

のかと尋ねます。すると桃太郎は次のように答えます。「日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹の忠義者を召し抱えた故、鬼が島へ征伐に来たのだ」。

身勝手な言い分で何の罪もない鬼を征伐する桃太郎と、被害者となってしまふ鬼。この構図は、ヨーロッパ諸国によるアフリカ諸国に対するかつての植民地支配にそのまま当てはめられます。ヨーロッパ社会はアフリカを「暗黒大陸」と見なし、その「文明化」を大義として武力による制圧を行い、キリスト教を普及させ、植民地支配を進めました。現地の人々がその被害を受けたことは疑うべくもありません。そしてゴリラもまた被害者でした。

——ゴリラのイメージは、そのようにして生み出されたのですね。

そう。植民地支配の陰には、それを正当化するために西洋人によって作られた「物語」がありました。その「物語」をより「探検家がゴリラに「物語」を与えた結果、「暴力的で恐ろしい悪魔」という価値観が共有されたのです。

——「物語」を作ることによって、社会は価値観を共有するのですね。

そうです。しかし、注意すべき点は、ヨーロッパ社会が必ずしも意図的にアフリカやゴリラの「物語」を作ったわけではないだろう、ということ。当時、彼らにとっでは、それが当然の世界観だった。何の疑問もなく、その「物語」が作られていったのです。それほどに「物語」には強い力があり、いつしか常識となつて人間社会に流通していきます。

**多様な価値観を育む教育を**  
——これからの教育の在り方について、どのようなお考えをおもちですか。

今、世の中では「自己実現」という言葉がもてはやされています。この言葉は生涯の目標をもち、自分にしかできない何かを達成する、という意味です。しかしそれは真の意味で使われているのでしょうか。

現代流の自己実現を突きつめていくと、それは周囲と競合し他者を押しつけて自分

アルに想起させるために巧妙に使われたのが、「凶暴で恐ろしい悪魔」としてのゴリラです。

「物語」を読み解くとき、作った側の視点ではなく、作られた側の視点から検討することが必要だという思いをこの文章には込めたつもりです。「物語」の裏側には、必ず作った側の意図があり、時にそれは正当化の手段として成立しているからです。

## 「物語」のもつ強い力

——人間社会はなぜ「物語」を重視するのでしょうか。

それは、人間が身体よりも言葉を優先するからです。そもそも言葉が生まれたのは今からたつた七万年前のことです。その頃、集団の規模が大きくなり、人間は多くの仲間と効率よくコミュニケーションを取る必要

がトップに立つ、ということになってしまふ。この「物語」の裏側を見れば、自己実現とは、その人が達成した成果を無理やり他者に認めさせるものだということがわかります。

——誰かから認められないかぎり努力は報われない、ということですね。

ええ。他者に評価を強制してなされる自己実現の「物語」は、価値の一元化の「物語」とも言い換えられるでしょう。多様性を重んじ、創造性を育む世界では、そのようなことはあつてはいけません。特に学問の世界では避けられるべきです。私の考えでは、学問においては一芸に秀でる必要もありません。むしろ雑多な知識や多様な価値観が必要とされる。一元的な価値基準のもと利益追求型の研究を行うばかりでは、常識をひっくり返すことも、真に革新的なアイデアを生み出すこともできません。競争原理だけに頼るだけではいけないわけです。

現在の日本の学校教育は、到達点を決めて段階的に達成していくシステムになっています。もちろんどんな教科にも基礎知識が必要ですから、この教育方法は間違っていない。しかし、基礎の上で自分なりの考えを発展させるほうが本来は重要で、そういう力は到達度を競う環境では育ちに

要に迫られました。そこで発生したのが言葉です。

言葉とは、事象を分類して記号として示したり、異なる物事を比喩を用いて説明したり、過去の出来事を描写するのに優れた効力を発揮するツールです。「向こうの山には行くな、土砂崩れが起きていて危険だ」という情報を言葉なしに人々に伝えることは難しいのですが、言葉によって「方向」「山」「土砂崩れ」「禁止」「危険」といった概念が抽象化され、意味が共有されていけば、素早くその情報を伝達することができます。このように言葉があるからこそ人間は膨大な情報を交換することができています。

言葉は、ロジカルに現象の因果関係を説明することにもたけています。この因果関係が、「物語」に相当するものです。言葉は「物語」を生み、その「物語」は価値観の二元化と共有を促進します。ヨーロッパ

く。いくらでも横道にそれながら自由に発想を積み重ねていくことのほうが本来は大事なのです。



### 山極寿一

1952年、東京生まれ。人類学、霊長類学者。京都大学総長。30年以上にわたり、アフリカの各地でゴリラの野外研究に従事。ゴリラ研究の第一人者。著書に、『暴力はどこからきたか』（NHK出版）、『家族進化論』（東京大学出版会）、『ゴリラは語る』（講談社）、『サル化』する人間社会（集英社インターナショナル）など。